

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#17のテキストです。

○河原功也 皆さん、こんにちは。

東京都渋谷公園通りギャラリーは、音声コンテンツを配信するプログラム「渋谷ラジオ」をお送りしています。ギャラリーの学芸員が気になるテーマを設定し、作家や専門家に限らず、様々な人の生の声を伝えます。

令和6年度は「展覧会のあと」と題した番組をお届けします。これまで当ギャラリーで開催した展覧会において出会った作家や施設関係者をゲストに迎え、お話を伺っていきます。

今年度の番組「展覧会のあと」のナビゲーターを務めるのは、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の河原功也です。

そして、配信の第5弾のゲストは、特定非営利活動法人障害者アート支援工房ココペリ代表の米田昌功さんです。米田さんは、当ギャラリーで定期的に行っている展覧会シリーズ「アール・ブリュット ゼン&ナウ」のVol.2「Echo こだま返る風景」の出展作家である磯野貴之さんの作品を管理されている工房の代表をされています。

よろしくお願いします。

○米田昌功 よろしくお願ひします。

○河原 まずは、米田さんに簡単に自己紹介をしていただきまして、これまでのココペリでの活動について伺っていきたくと思います。

それでは、ちょっと長い前振りになってしまったんですけど、ココペリについて、米田さんの簡単な自己紹介などもお願いします。

○米田 米田昌功と申します。障害者アート支援工房ココペリの代表をさせていただいています。基本は美術作家としての活動も行いながら、NPOの運営と、あと障害者芸術活動支援センターの事務所もNPO内で設置して、そういう支援も行っています。

ココペリは、いわゆる福祉事業所ではなくて、アートNPOとして最初から中間支援としての活動を行っているところなんです。県内の障害のある方で、美術に関心のある人とか、アートがないと生きていけないというような人をつないで、社会に紹介していくというよ

うなところをずっと、NPOとしては2009年から行っています。

○河原 2009年といたら、今年で15年目、14年ぐらいたっているという感じですか。

○米田 そうですね。だけど、そのNPOに至るまでの経緯というのはあって、私はもともと美術教員だったんですね。それで支援学校の美術というのに関心があって、教科書にとられない美術指導ができるというので面白いなと思ってずっと関わってきていたんですけど、そこで富山県内に美術部というのがなかったんですね、支援学校の中で。やっぱりすごい作品を描く人が何人もいるので、そういう人たちを紹介できないかなということで美術部をつくって、結局、彼らが卒業した後の創作活動の場がなかったんですね。福祉の分野ではまだ美術活動とかというのはそこまで力が入ってなくて、それで、絵が描けなくてちょっと不安定になったとか、面白くなくて結局やめてしまったみたいな、そういう話も出てきたので、何か1つよりどころになる場所をつくって、みんな美術を通して自信を持ってもらえたらなということで、ワークショップをする絵画グループのようなものをまず始めて行って、それが活動の広がりをもっと必要だということでNPOにして、今に至るという感じですね。

○河原 米田さんがその特別支援学校の美術の先生をされ始めた頃というのは、いつぐらいになりますか。

○米田 もう、平成三、四年からとかじゃなかったかな。(笑)

○河原 じゃあ、91年とか92年とかぐらい。

○米田 そうですよ。そんなことないか。まあ二十五、六年、そうですね、30年前ぐらいだから、1994年ぐらいかな。

○河原 ちょうどそのぐらい。

○米田 もう遠い昔のことなんで、覚えていないですよ。すみません。(笑)

○河原 いえいえ、唐突に。(笑) そのぐらいの頃というのは、富山県内に美術部というのもないし、障害のある方が絵を描いたり、何か立体を作ったりという風土もない状態だったという。

○米田 そう。障害のある人が、そういう昔から福祉分野での展覧会、障害者の展覧会みたいなものはあったかもしれないんだけど、障害者が作品を作って発表するとか、そういう作品を展示するとかというようなことは、もうイメージにもないというか。実際には外を歩いている人も少なかったですしね、当時は。

○河原 そうですね。

○米田 車椅子もほとんど見かけないような時代でしたよね、最初。私は養護学校に、当時は養護学校って言うんですけど、いたから接してはいましたけれど、街の中ではまだまだ。まだ障害者用のトイレというようなものも普及していない時代ですよ。

○河原 今ではもう、トイレといえば必ずついているような。

○米田 そうですね。そういう場所にしかお出かけに行けないという時代。(笑)

○河原 そうですか。今では結構、町なかであったり電車であったり、いろいろな障害のある方もいらっしゃいますし、仕事に向かわれている方も見かけたりもするんですけども、30年ぐらい前というのは、そういうものは結構、ある種分かれていたような感じですよ。

○米田 そうですね。まだ障害のある方の存在というのを、一般の方は意識できるところまで行っていないような状況ですよ。山下清とかね、有名な人はぽつんぽつんとあるけれども、やっぱりトピックみたいな情報しかなくて、一般の方がふだん接するというのは本当に限られた人、ご家族とかそういう人だけみたいな、福祉関係の人だけみたいな感じで。でも、その中で、やっぱり作品がこんなにすごいのに、どうして発表をもっとしつかりと、みんな知ったほうがいいんじゃないかなというような気持ちがありまして、それで美術部をつくって、もう最初の段階から対外的な活動を中心に、外で発表する、外の公募展、しかも障害者の公募展ではなくて、一般の公募に出していくというようなやり方で周知していったという。たまたま当時は地元の新聞社だったりがすごく関心を持ってくださって、新聞社のギャラリーというのを無償で貸していただいて、毎年定期展をやっていくというようなことをやっていたんですよ。

もう、学校の中で文化祭とか学習発表会とかあるじゃないですか、そこには出さずに、外にばかり出していたという。(笑)

○河原 ちょっと飛び級というか。

○米田 そう。だから、あんまりよく思っていなかった人もたくさんいると思います、校内では。(笑)

○河原 (笑) なるほど。今だから言えるみたいな

○米田 何だ、あいつはという。(笑)

○河原 なるほど。でも、その作品がすごいというところのまず発見というか、米田さんの、自分自身が表現者であるということも含め、身近にいた方々の作品の魅力に気がついたというか、そういうところがやっぱり最初の衝動というか、原点みたいな感じがありますかね。

○米田 美術大学に行っていたときに、もう何かそういう作品に出会う機会とかがあって、やっぱり気にはしていたんですよ。でも、それって、その当時にもらう情報って、やっぱり既に評価されていた人だったりとかだけれども、支援学校に行って、目の前にいる人たちが何か一般の展覧会に飾っても全然遜色がないというか、むしろ強い、こっちの作品のほうが魅力的なんじゃないかって思うような人がたくさんいるのにびっくりしてしまって、「何だ、これは」って感じでしたよね。こんな面白い世界があるのに皆さん知らないのは、特に美術関係の人には、これはみんな知ったほうがいいんじゃないかと思って、美術関係の人に特に強く周知していくような感じでしたね。

○河原 なるほど、なるほど。何かちょっとその辺は、後ほど、アール・ブリュットといううちのギャラリーが中心的に紹介しているものとかとも含めて、改めて聞きたいなと思うんですけど、今、実はココペリに来させていただいて、この収録をさせていただいているんですけども、ココペリの活動、日々の活動とか、あとは展覧会をして外に出ていくというようなことだったり、もともとの原点のワークショップをベースにしているということもあると思うんですけど、具体的にどういう活動をコンスタントにしているかというのを伺ってもいいですか。

○米田 基本的には平日は誰もいなくて、いろんなどころ、福祉事業所とかで平日は働いたりとか企業に行っている人たちが、3週間に1度、ここに、この場所に集まってきて創作活動をする。もちろん、皆さん、創作が命の人たちばかりなので、ふだんは家で描いていたりとか、福祉事業所でも、今は理解してもらって、時間をいただいて創作している人もいるんだけど、やっぱりここに来て一度、月に何回かはここで絵を描くというのが1つの支えになっているような感じで、皆さん集まってきますね。

それはもう創立当初からずっと変わらないペースでやっているんですけど、それ以外に、やっぱり普及とか発信というところで、最初から、さっきも美術部のところで言いましたけど、いわゆる障害のある方の展覧会というもの、そういう枠にあんまりこだわらずに、例えば現代アートを扱うギャラリーであったりとか、あるいは現代アートのイベントですね、県内で行われているようなイベントに積極的に参加して行って、そういうところでこういう作品があるということを知ってもらおうというようなことをやっていました。

そのココペリというのができて、県内にココペリにいる人たちの作品の面白さっていうのを知ってもらおうとは思ってやり始めているんですけども、ただ、最初からの予想として、三、四年やれば、ココペリの人たちが毎年同じような自分のスタイルの作品を毎年

発表していくというようなやり方をやっても、これは本当に、いわゆるアール・ブリュットですよ、アール・ブリュットとか障害のある方のありのままの表現みたいなようなもののよさを伝えるところまで響かないんじゃないかなというようなことを、もう初めの段階でちょっと考えてしまって、ココペリでやっぱり展覧会とかをやったときも、今言ったように、現代アートのいろんな、一般の現代アーティストの方とのコラボだったりとか、あるいは展覧会をやるにしても、うちらで企画してやるにしても、例えば、当時だったらやまなみ工房だったりとか、あるいは滋賀のNO-MAだったりとか、そういうところにも積極的にアクセスして、協力してもらって、作品をお借りして、なるべく多様でクオリティーの高い、美術としても評価を既にされていたりとか評価できるような作品というのを集めて、こういう分野の作品の魅力とか面白さというのが伝わるような展覧会づくりっていうのを心がけてやっていましたね。

ただ、うちはお金がないので。(笑) それをやるにしてもやっぱり限界があるわけで、それを補うためにいろんなアイデアを出して、例えばトランク・プロジェクトというプロジェクトを立ち上げてですね。

○河原 ああ、はい。

○米田 トランクに富山のココペリの作品を詰めて、例えば沖縄に送って、沖縄がそのトランクの中の作品を出して、自分のところの作品を詰めて富山に送り返して、それぞれで展覧会をするというような、そういうようなことをやって、例えば一時期は、展覧会に沖縄と岡山と奈良と滋賀、福井とかって。

○河原 すごいですね。

○米田 いろんな県の作品を集めてやるっていうような。何か展覧会をやるのってハードルが高いじゃないですか、作品を送ったりとかというの。そこを何とか気軽にできないかなというので、そういうことをやって。それを何度かやっていますね、作品交流という形で。

やっぱりお金がないけども、人はいる。でも、つながりはないとか、そういうところを何とかカバーしようと思って、そういう1個アイテムをつくっていくとか、そういうことをずっとやってきたような感じですね、ココペリの中で。

○河原 結構このトランク・プロジェクトって、何かメール・アートというか、メールでやり取りすること自体がアートというかパフォーマンスのようなものにも、聞いていて思っ

○米田 はいはい。アクションアートのつもりでやっているんで。

○河原 あっ、やっぱり、まさにという感じで。これってだから、交換して、それは何か展示をすとか、何か写真に残すとか、そういう展開もあるんですか。交換してからの実際の。

○米田 交換して、こちらでこういう展示をしましたというのは向こうに送って。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 やっぱりそのトランク・プロジェクトを始めたのが2012年とか。

○河原 じゃあ、結構、もう10年以上前。

○米田 うん。ココペリができてすぐの時期だったんで。当時は展覧会というのはあちこちでやり始めていたけれども、有名どころは都市部に行けばいつもね、必ず毎年何か展覧会をやっていて見られるというような状態だったけど、地方にいて活躍している、大規模な展覧会には呼ばれないけど、やっぱりいい作品っていっぱいあったんで、それが県境をまたぐようなことができないかなというので、トランクに詰めてもいいよみたいな作品であれば、向こうが了承して、お互いにそれを承諾してやれば、意外とできるんじゃないかなと思って。

○河原 このアイデアって、やっぱり美術館だったり公共の施設とかになると、作品をそういうふうに送るとというのが、なかなかアイデアとして考えられないというか。

○米田 そうです、そうです。(笑) そうですよ。

○河原 そこの何か飛び越えてくるアイデアというか、そこが面白いし。

○米田 本当に何か、やっぱり県内でも、年に1回展覧会に出せたとか、内輪の展覧会に出せたとかという人たちが、県外の何かすごいところ、もう行ったこともないようなところで展示されたというのがすごく面白いというか、周辺の人に面白がってもらえるというか、ご家族もそうだけど。行けないけど、富山で展示されてよかったですという感じだったりとか、それが1つ、その人の活動の幅を広げたりとかっていうところにつながる、次の展開につながるきっかけになるんじゃないかなというのはありましたよね。

○河原 なるほど。そのアイデアが、さっきも言っていたように、つながりをつくるアイテムとか場所づくりをして、そこにいろんな人が入るといとか関わることで、いろいろ動き出していくという。まず、ココペリのやっていることといとか、ココペリらしさみたいな感じを、今伺いして感じてましたね。

○米田 今、もう作品交流じゃなくて、地元の人が「トランク貸してよ」といって。(笑)

○河原 えっ。(笑)

○米田 それこそ、展覧会するからって。

○河原 この富山の地元の方が。

○米田 そうそうそう。なので、城端っていうすごく古い町並みが残っているようなところとかがあるんですけど、そういうところの人たちが「お祭りのときに作品飾りたいから、トランク貸してよ」といって取りに来られて、本当は作品交流としてトランクを設定していたんですけど、一方的に貸して、向こうで開いて、商店街の人がわーっと集まってきて、作品を選んで、自分で飾ってというようなことを毎年どこかでやっているんですよ、今。

○河原 へー。

○米田 本当、ついさっきそのメールが来て、今年も借りに来ていいですかっていつて。

○河原 それは、ココペリがこれまで展覧会をやったりしたものを見て、その商店街の方とかが連絡をしてきているって感じになるんですか。

○米田 そうですね。何かその商店街でそういうのを飾れたらいいねみたいな話が来たときに、話の中で、トランク・プロジェクトというのをやっているといて、ココペリの説明をしているときに、「それで、そのトランク借りられませんか」と。(笑)

○河原 もうそこで。

○米田 そうそう。そういうところから始まって、そういうのをやっていたら、ほかの地域の人が口づてで聞いて、「じゃあ、うちでもやりたいな」とか。

○河原 へー。

○米田 そういうようなことで広がったりとか。こっちもそのトランクが5つぐらいあって、その中にパッケージングしてあるわけですよ、もう作品が。

○河原 なるほど、トランクで送るものをセットされているんですね。

○米田 なので、送るだけなので、こっちの負担も少ないですし、今までだと、何かそのたびに作品を選んで、持っていつて、自分たちで展示しなきゃみたいなの。(笑)

○河原 そうか、その大変さもあつたと。

○米田 そうそうそう。それからお互いに解放されるというか、向こうもトランクを自分たちで開けて作品を選ぶという主体性が入ることで、やっぱりちょっといつもとは違う、こっちがお願いして展示して、ありがとうございますっていうのじゃなくて、自分たちが「これ選んだよ」という。酒屋さんがお酒の絵を選んだりとか。

○河原 なるほど。(笑)

○米田 (笑) 面白かったのが、すごく印象に残っているのは、八百屋さんが黄色い絵を選んで持って行って、かんきつ類が並んでいる、段ボールの並んでいるところに飾ったりとか。

○河原 ああ。何か自分の中で展示のイメージをして、選んできているという。すごいな。

○米田 そうそうそう。それって、アートに参加している感じがあるじゃないですか、互いに。

○河原 そうですね。

○米田 それがすごく面白くて、こんな効果もあるんだと思って。それで、その作家とのやり取りをお店の人がずっと続けていたりとか、そういうことも起きていて。

○河原すごいな。そのつながり方はすごいですね。

○米田 うん。

○河原 なるほど。そうか、だから、アート支援工房ココペリって、ただのアトリエとかではなく、もっと街に出て行ってというか、システムをちょっといろんなところにお届けし、そこでまた知らぬ間にいろいろ動きが発生していくみたいなのが。

○米田 ある意味、そうですね。そういうのを、思いもしない広がりというのをいつも感じながら。でも、そういうのって、やっぱり障害者アートとかアール・ブリュットが持っている1つの力みたいなようなものもあると思うんですけどね。

○河原 何かこう、地域の活性化にもなっているような感じも今してきたので。面白いな。

○米田 そうですね。今年の秋は伏木でやるんですよ。

○河原 あっ、伏木で。

○米田 伏木って、去年の地震で結構被害が大きくて、ここはもう海岸線沿いなので、それでも結構瓦礫になっている家もたくさんあって、かなりたくさんの方が引っ越しているんですね、住めなくなって。

○河原 じゃあ、結構、今、人がいなくなっている家々も。

○米田 そうそう。今、大分家を崩して、危なくなったから崩し始めているんですけどね。いわゆる倒壊したりとか派手な壊れ方というのはないんだけど、街全体が液状化でゆがんでしまっているというか。だから、最初は大丈夫と思っていたても、やっぱり住めないなということで変わってから。でも、それでもここで「いや、元気ですよ、私たちは」といつてやっている人たちがいっぱいいるんで、そこをちょっと元気づけるために、「じゃあ、今年の秋はトランク・プロジェクトをここでやりましょうか」みたいなことで、今、話が

進んでいて。

○河原 立地的には、もうすぐそこという感じですか。ここも住所は伏木ですけど、この近くで。

○米田 そうです。ここの、このココペリがある向こう側が……

○河原 東側になるんですか。

○米田 そうですね。東側に河口ですね、大きな川があって、ちょうど港にかかる場所なんですよ、ここがちょうど。

○河原 そうなんですね。

○米田 ここからちょっと地層が違って、ここから向こう側が、昔、海だった地域で、やっぱり向こう側の被害がすごくて。

○河原 なるほど。

○米田 特に伏木駅周辺とか、昔、港ですね。まあ今も少し港として使っているけれども、昔はもっと北前船とかがいっぱい入っていたようなところだったんで。国宝の勝興寺というお寺があるんですけど、その勝興寺自体は山の上にあるので大丈夫なんだけど、高台にあるので大丈夫なんだけど、そのやっぱり周りの家、街とかが結構被害が多くてですね。でも、あえて何かそういう被害があった場所とかにも作品を置いて、実際のその姿を見てもらうというようなこともやってみたいねというようなことで。

○河原 ああ、そのままの状態。何ていうか、その地震の被害であったり、その後みたいなものも結構ダイレクトに見えるようにするというか。

○米田 そうそう。展覧会をやって、そこだけ見せるというんじゃなくて、やっぱり街、今の街というのを見てもらって、そこで、「頑張っています」じゃなくて、「元気ですよ」というところを見せたいみたいな。

○河原 なるほどな。

○米田 そこにアール・ブリュットが関われるというのだったら、もうぜひにということで、今、ちょっと話が進んでいるところですね。

○河原 うーん、すごい。ちょうど1年とちょっとたってという感じですけど、ココペリ自体は、その頃はどうかだったんですか、状況は。

○米田 当時は、直接被害を受けた人はそんなに多くないんですけど、やっぱり氷見の人とかがいるので、その氷見の方は、もう結構ショックで、怖くて家に入れなくなったりとか、そういうのは。ただ、ココペリ以外の方で、伏木で作家活動をやっているような人も

いるんですけど、そこはおうちがお寺さんで、お寺が、いわゆるレッドカードを張られるんですよ、人が住めなくなった建物には。いろいろ段階があって、昼は人が入ってもいいけれども、住めないという。

○河原 昼という分け方が。

○米田 お昼だけ入っていいよという。だから、そのお寺の結局実家に引っ越して、実家で生活しながら、お父さんだけそこのお寺に行って、昼はお勤めをするというような生活になっているんだけど、やっぱり実家に戻っても、ルーチンとしての創作活動というのはずっと続けている人とかがいて。あとは、液状化で家自体がもう完全に傾いてしまって、だけれども、その中でやっぱりずっと、より以前よりも強化された創作を行っている方とか。(笑) そういう人もいるし。

○河原 おお。強化というのは、何ていうか、創作することでより自分を保つというか。

○米田 そうそうそう。その創作活動がより強く入り込んでいるというか。その人はどういう人かという、コピー用紙と瞬間接着剤だけで、本物そっくりの虫を作っている人なんですよ、昆虫を。(笑)

○河原 (笑) すごい。

○米田 もうすごいんです。実物大で。

○河原 あっ、実物大で。

○米田 実物大で作っていて。

○河原 なるほど。

○米田 瞬間接着剤を使うから、ちゃんと触手とか足とかも全部紙のはずなんだけど、かちこちなんですわ。だから、結構丈夫なのを作っていて。でも、その人が地震の後どうしたかという、自分で虫を捕まえて、家の中で飼いながら、それを見て作り始めたんです。

○河原 じゃあ、外にちょっと行きづらいという状況を……

○米田 そうそうそう。今までは凶鑑だったりとか。

○河原 なるほど。

○米田 そういうところで、よりモチーフに強く入り込むような活動になったりとか。

○河原 なるほど。

○米田 作品自体ががらっと変わった人もいるし、地震を契機に。不思議な、そういう人もいますよね。

○河原 コペリの、この今いるアトリエ部分の後ろに大きな倉庫があるかと思うんです

けど、その辺りも、こっちの西側は比較的そこまで。

○米田 片づける程度で済んだ。

○河原 という感じ。なるほど。

○米田 そうそうそう。こっちの山のほうは大丈夫だったみたいですよ、高いところは。やっぱり川とか海に近いところがすごかったですよね。道路がもう本当に波打っている状態だったので。石川とか能登はもっとすごいですけど、ここはそう。だから、何かじわじわと来る感じだと言っていましたね。大丈夫かなと思って住んでいても、やっぱり無理だというようなことで。

○河原 ああ、なるほど。しかも、見えない大地の下でまだ何かが、液状化しているという事は、どんどん傾いていたり、そういう怖さがありますよね。

○米田 そう、1年たって、もっと傾いているところもあるし。あれも何か嫌ですね、ああいうのも。

○河原 そういうところで、ある種、表現することとか創作の強さというか、その人が続けている面白さとか、そういったところにも気づいたというか、米田さんの関わりの中で見えてきたみたいなことでしょうか。

○米田 やっぱり知的障害を持った方とかがそういう結構ショックを受けると、そういうものを捨ててしまうんじゃないかなってちょっと思ったことがあったんだけど、全然皆さん、何か動じないというか。(笑) ココペリの作家さんもそうですけど、「この人、アーティストやな」と思った人って、みんなやめていないんですよ、全然。だから、やっぱり彼らにとっては、ご飯を食べたりとか夜寝たりとかというのと同じステージにある活動なんだというのがすごくよく分かりますよね。

○河原 僕も作品をいろいろ、全国の福祉施設であったり個人のご自宅とかに見に行かせてもらいますけど、やっぱり自分のこだわり、執着を持ったものに対して非常に真っすぐに取り組んでいて、日常生活と切り分けられない、何か表現と生活が一体化しているという。大きな自然災害なりが起きても、そこはぶれにくい方も多かったのかもしれないですね。

○米田 まさに、そういうありのままに、率直に作品に取り組んでいる人たちというのは、もうぶれないということがよく分かりましたね。だから、なおさら、やっぱりこっちもそういう何か特別、復興とかというのをやらなくても、アートとして今までどおり人につないでいくという活動を続けていくべきなんだというのがすごく分かったというか、フラ

ットでいていいんだなという。

○河原 やっぱり、ちょうど米田さんが障害のある方と関わり出したのが30年ぐらい前と
いうので、結構、平成の時代から、今、令和ですけど、日本で災害もすごくたくさんあつ
て、目にしたり情報として入ってくるのが日常的になっている現状だとは思んですけど、
何かよく聞くのが、災害があつて、やっぱりこれまでの日常に戻ってほしいという思いが
あるときに、自分の生活と創作が切り離せない、大切なつながりのある方々の作品であつ
たり、行為とか活動を見ることで、そのぶれなさに勇気づけられるというか、何かそうい
う効果も、もしかしたらあるのかなつて、話しながら。

○米田 いや、おっしゃるとおり。

○河原 「この人、変わっていない。すごいな」「あつ、あの頃の絵だ。今もこれをして
いる」みたいなところで、見た人のこれまでの日常だったり、これから続いていく日々
に何か自信が持てるというか、そういうような希望があるアートというか、そういう感じが、
今話しながら思つて。思いついてしゃべっているんですけど。

○米田 いやいやいや、本当にそうですね。だから、「いや、もうこれでいいんだ」とい
う感じですね。作品を作る場、例えばココペリとかも、地震とか、コロナのときもそうで
すけど、休めばいいのかなみたいに思っていたんだけど、結局あんまり休まずにやってい
るんですよ、うちら。ずっと同じペースで。

○河原 おお、すごいな。

○米田 やっぱりそこが彼らに、最初に作品を見たときの彼らが持っている衝動性だつた
りとか集中力に対する驚きというのが、こういうような災害の中でもこうなんだという、
改めて認識させられたといいますか、すごいなという。彼らはやっぱりアーティストとし
ても尊敬できる人たちやというのを改めて感じたといいますか。(笑) 面白いですよ。

○河原 作品を通してその個人個人の面白いところとかかっこいいところというのが、ど
んどん伝わっていくような感じがするなと思います。ありがとうございます。

○米田 いえいえいえ。

○河原 ちょっと自己紹介から何かいろいろ盛り上がっちゃつて。(笑)

○米田 (笑) 本当ですね。

○河原 すみません。

○米田 いえいえ、こちらこそすみません。